

EYES 2

A m i k a & M i c h a e l

佐野光音

Hikarune Sano

eternity



エタニティ文庫

一章 エメラルド・クイーンパレス

突然ですが、あたし高橋阿見香、余命あと一日と思われれます。自己診断ですが。

自分のことは自分が一番よくわかると言いますから、たぶん正しい診断だと思います。爆発五秒前！ とカウントしたくなるほど、ストレスが溜まりまくります。絶対こいつら、綿密な計画に基づいてあたしを過労死させようとしているのよと思わずにはいられません。過労死を装った殺人つてやつです。

ついでに叫ばせてもらおうと、ものすごく、マックのストロベリーシェイクが飲みたい！

夏休みに入って、二週間あまりが過ぎようとしている。

新しい生活は、ホント最高！ なんて、言えるわけがない。もう、もう、最悪。超最悪を通りこして、人生のアクラメの境地が開かれてきた感じ？

いきなり現れて「婚約者」だとかわけのわからないことを言った厚顔無恥の傲岸不遜

冷血レイブ男、ミカエルとの生活はいつまで経っても慣れなくて、顔を合わせるとお互いピリピリしてケンカばかりしている。しかも毎日、みっちり英会話だのマナーだのその他モロモロのカリキュラムを強いられ、脳みそも体もフルに酷使されて、夜は見事に撃沈。ベッドで隣に寝てるのが、宇宙一嫌いな男だろうと妖怪だろうと、おかまいなし状態。ベッドに入って、横になった一秒後には意識がない。もつとも、「隣に寝てるのは、どでかくてサイコーに可愛くないぬいぐるみ！」と強烈な自己暗示をかけてるのも効果があるのかも。この殺人的カリキュラムのおかげで二週間あまりで英会話の基礎を叩き込まれ、ぎこちなくも身に付いたのは、ちよつとは感謝しないといけないけれど。

檀君と、お母さんと、電話で話す時間だけが安らぎになっていた。ついでに文月とお喋りも。お母さんとは別れたまま会えていないけど、おじいちゃんとおばあちゃんと一緒に暮らしていて、けっこう楽しそうにやっていると見たいなので、安心はしている。「頻繁な行き来は許可できないが、月に一度くらいなら会ってもいい」とミカエルも言っていた。月一限定って刑務所の面会よりひどくない？ と聞いたときはムツとしたものの、会う許可を一応は出してくれたので、夏休み中に行こうと思う。

檀君と付き合い始めてから、あたしは微妙にアヤシイ人間と化している。特に精神的に疲労困憊しているさなかに、ふと桃色気分になってしまおうとおかしさ倍増で、地の果てまで笑って踊りながら駆けていけそうな気がしたり、一人でいるときに突然ニマニマしだしたりして、超ブツキーな人物になっている。

自分が淫乱女の前科持ちだなんてことも、そのときばかりは忘れていられる。都合の悪いことは全部棚に放り投げて——投げすぎて落ちてきそうな気配はあるけれど、とりあえず気にしない。婚約破棄のために脱・処女を狙ってる人間が気取ったことも言うてらんないし、羞恥心なんぞも抱えていられない。

あの冷血鬼畜男も、「頼まれても二度と触らない」と言い切つてからは、まったくへんな素振りを見せなくなった。実にめでたい。素晴らしい！ 盆と正月と自分の誕生日と、お釈迦様の誕生日とイエスキリストの誕生日がいつべんに来た感じ。「日付はいつ？」という突っ込みは置いといて、カラダが平和でいられるって、まじでホツとする。同じベッドで寝なきゃならない身としては、あいつを男だとは微塵も思いたくない。向こうだって、もはやあたしを女だなんて考えもしていないだろう。

そんな中、あたしと檀君はお互いの都合の良い日に、デートをすることになった。檀君との初デート、人生初のデートだよっ。

なんだか冗談抜きに、興奮しすぎてポツクリ逝きそう……

待ち合わせは、お互いの家の中間地点に当たる新宿になった。けれど、デートの予定に浮かれてばかりもいられない。ゆゆしき問題があるのだ。素晴らしく窮屈なことに、あたしは、護衛の人、SPなしでの行動を許されなくなっているから。

あたし付きのSPと紹介された四人は、男性二人と女性二人で、目立たないように全員日本人に見える容姿をしている。とはいっても、スマクラグドスの血も入っているので、生粋きんすいの日本人ではないという。しかもただのSPじゃなくて、変わったほうの能力も持っている人たちだとか。あんまり考えたくないけど、いわゆるズバ抜けた集中力と意思力で防御のパワーを発揮する、超能力系の力を使える人たち……だそうだけど、あたしはその手の話がどうも苦手。ミカエルたちと出会ってから、おかしなことをあれこれ経験させられてきたけれど、全然慣れないし慣れたくもない。

超能力といっても漫画や映画にあるような、どこにでも瞬間移動できるとか、自由に空を飛べるとか、いきなり炎を両手から燃え上がらせるとかそういう類たぐいではなく、ごく自然な力として使われているものだという。防御をするための透明な壁を集中してイメージすれば、サイキックの攻撃からも身を守れると言われても、あたしからすれば、「それのどこがごく自然の力なの？」と引かずにはいられないキテレツな話だ。

デートを決めてから、SPがいたんだった！と青ざめて頭を抱える羽目になり、白い目で見られるのを覚悟で、女性のSPの一人に訊きいてみた。どこへ行って誰と会って何をしていたかまで、ミカエルに報告するのかわ、って。自己紹介の時、今年二十八歳になると言っていた土田つちださんは、嫌な顔ひとつせず丁寧に答えてくれた。

「私たち身辺警護者は警護対象の方と長く行動を共にしますので、その方のプライバ

シーを尊重し、他言するなと求められたことについては、たとえ親御様から求められても秘密を守り抜きます。信頼関係を築くためには重要なことなのです。ですから危険が及ぶ事態でない限り、そういうことには関知しませんし、一切他言もしません。また、できるだけ距離を取ってわからないようにしていますので、ご安心を」

そう言って優しい笑顔を見せた土田さんは、SPといってもいかつい印象はなく、ノーマイクでもかなりいけている。もう一人の女性も、すっきりした体型の美人さん。だいたい二人とも男性SP二人と同様に海外の特殊部隊に所属していたそうだ。バリバリ訓練してきた人たちにあたしなんかのSPをさせていいの？なんて、申し訳なく思ってしまう。

「いってらっしゃいませ」

執事のバーディングが車を回すと言うのを断ると、専属のSPが決まったからかすんなりと了承してくれ、ドアを開けて見送ってくれた。他の使用人たちもそうだけど、小娘のあたしに不愉快そうな顔をちらつとも見せない。

敷地を十分ほど歩いて門の外に出た途端、都会のざわめきが耳に届いた。このあたりは都内でも一等地で、近隣には東宮御所もある。都心とは思えないほど自然が溢れる場所、東宮御所の森、ミカエルの家の森、この先の代々木公園の森、明治神宮の森、さらに先の新宿御苑などがあるから、上空から見れば蒼々あおあおとして見えるかもしれない。

待ち合わせの新宿に電車で向かいながら、久しぶりの公共の乗り物の中で考え事をする。

アレは、どうしよう？ あの、キセイジジツ。『他の男とやっちゃって、妊娠するかもしれないから結婚できません』を実行する計画を練らなければならぬのだけど、どうすればいいんだろ!? あたしから、檀君を押し倒す？ つうか、押し倒してもヤリ方がわからないッ。いや、ヤリ方以前に、檀君に嫌われそうだよ！ なんて赤くなったり青くなったりしながら電車の席に座っていたら、周囲の視線があたしに集中していた。……やばい……頭の中身だけじゃなくて、見るからに超ハズカシイ危険人物になるよ……

待ち合わせ場所の南口には、檀君のほうが先に来ていた。あたしに気がついて微笑する彼に一步一歩近づいていくのが照れくさくて、視線を合わせられない。

「久しぶり」

そばまで来たら、檀君の声がした。低くもなく、高くもない声。よく通る、快活だけれど落ち着いた話し方は、どことなく育ちの良さが滲にじんでいる。電話ではしょっちゅう話しているのに、魅力的な生音声に耳も心も打ちぬかれて、その場でしばし放心してしまふ。

明らかに反応が鈍いあたしに、「高橋？」と呼びかけて、檀君が怪訝けげんな顔になった。

「……久しぶりで、ほうつとしちゃった」

ちよつとだけ彼を見上げてから、ようやく答える。本人を前にしたら、既成事実どころか顔すらまともに見られないって、どうすんのよ……。初めて見る私服姿にも、心臓が止まらない。いや止まったらまずいんだけど。ウオッシュブルのデニムに黒のレザースニーカー、グレーのコットンシャツ、スリムなデニムは浅穿あさばきだけだからしくは見えず、足の長さも損なっていないくて、制服の時よりもずつとスタイルが良く見える。……ほんとにこの人、かっこいいんだ。今更ながらに実感させられる。しかも初デートの日に。

「それ……狙ってる?」

「……え? なに……?」

「狙ってなかったら、けっこうヤバイね。頬を赤らめて上目遣いでチラッと見るの」
苦笑して、あたしから視線をそらしている。

「その手の計算をする性格だとは、思ってたなかったんだけど」

「計算なんかしてないよッ」

本気で恥ずかしいんだってば!!

「なんか、雰囲気変わった? 私服のせいかな。なんとなくお嬢っばい」

山手線に乗るために構内を歩きながら檀君に言われた。

お嬢? んなバカな。洋服だってアパートから持っていったものだし。あたし用に揃

えられたブランド物の服なんて、恐れ多くて着られない！ シャラがいつの間にか買
いこんできた服が、クローゼットにどんどん追加されて——手頃なセシルマクビーやイ
ネド、アズ・ノウ・アズ、アナスイ、ジルスチュアートのほか、セオリー、バーバリー、
セリース、クリスチャン・ディオールなど、雑誌でしかお目にかかれないハイブランド
まで勢揃いしている、あれはあたしの服ではない。親友の文月と同じでファッションに
拘りはなく、もっぱら「しまむら」常連のあたしだけ、ブランドの名前からいはいは知っ
ている。溜息ものの衣装たちを横目で見ただけでおっかなびっくりよ。二週間あまりで
数十着、バッグも靴も数えきれないくらい用意されていて、いったいどこまで増えるの
かと他人事のように心配してる。

「どうして着ないの！」って今朝もシャラに文句を言われたけど、着られるわけがない。
だって、着る理由がないもの。あたしにとって、あの家でのあたしの立場は「居候」
でしかないのよ。エミリーテンプルキュート、略してエミキユの、夏らしい水色の爽や
かで可愛いワンピースを見た時には、さすがにヨダレが出そうになり、今日着ていきた
い！ と猛烈に思いはしたけど……。でも、ありえないでしょ。あいつんちのお金でお
洒落して、他の人とデートって。今日も自分の手持ちの服で頑張って、カワイイ系を意
識したけど、持つてる服は飾り気のないシンプルなが多くて組み合わせに苦労したの
よ。デート用の服を買っておけばよかった。

「お、お嬢はないよ。か、髪型の、せい……かも」

まさか、この頃のマナーやら何やらの特訓の成果が、雰囲気にならで出てるってことは、
ないよね？ どもりながら言ってみると、

「ああ、そうかも。綺麗にカットされて似合ってるよ」

檀君は、あっさり納得して頷いた。

「バサバサだったもんね。あたし」

「熱心に手入れしてる感じではなかったね」

笑う檀君とじゃれているうちに、幸せ気分になってきた。初デートの気まずさも、瞬
く間に薄れていく。

原宿で電車を降りて、駅を出ると、露店を出している黒人の男性がいた。「ヤスイヨ。
ドウデスカ？」と片言の日本語で客寄せしている。素通りするつもりが、日差しを反射
して輝いた光が目にとまり、足を止めてしまった。銀細工のアクセサリーが青い布の上
に所狭しと並べられている。男性向けの物だけじゃなく、女の子が好む繊細なデザイン
のものも置かれていて、悪くないかと思って眺めてみる。こういう露店だからなのか、
高くない。

「買ってあげようか？」

笑って言ってくれた檀君に、「いいよ」と首を振る。耳や首や指に何かを付けている

のが苦手で、可愛いとは思っても、アクセサリーを身に付けることがあまりないのだ。けれど、「お付き合いの記念に」なんて心惹かれる文句にドキッとする。

「お付き合いの記念とか、するものなの？」

「さあ？ あってもいいんじゃない？」

軽く首を傾げてはぐらかしてから、檀君はアクセサリーを選ぶフリをする。

「今までしてたの？」

「さり気なく追及するね」

苦笑してあたしを見てくるので、大慌てで否定してみる。

「そういうつもりじゃ。っていうか、こういう記念がどうか、よくわからなくて」

追及するつもりなんてホントにないのだ。知ったところで面白くないだけだもの。四人いた元カノたちが、檀君好みの大人しめの可愛い子たちだったのは前に聞いた話で理解してる。気にならないと言ったら嘘だけど、張り合っても、しょうがないよ。自分が可愛いとは程遠いって、悲しいほど自覚してるから。

「オンナノコノヤキモチ、カワイイネ」

露店主の黒人が、ニコニコ笑いながらあたしと檀君を眺めていた。

「そんなんじゃないの、ほんとにっ」

見ず知らずの人にまで誤解されて、真っ赤になって否定する。そりゃ、目の前でこん

なやり取りしてるほうがオカシイんだけどっ。

「そこで、熱くならなくていいから」

檀君が面白そうに笑い、露店主も一緒になって面白がっている。

「コレナンカ、カノジョニ、アイソウネ」

どさくさに紛れてまぎ売しながら檀君にペンダントを勧める露店主。止めようとしたら、気に入ったらしい檀君からそのペンダントを差し出された。

「いいね。これ。どう？」

オーバル型の銀のプレートに、天使の羽が片方だけ彫り込まれたもので、シンプルな目を引く。最初に目を留めた、光を受けて輝いていたのがそれだった。

「好きだけど、でも」

「じゃ、これ下さい」

ためらっていたら、さっさと決められてしまった。

買うなら自分で払うからと、バッグから急いでお財布を出そうとするのを、檀君が笑いながら制して、露店主とやけに親しげに目配せしあっている。

「ここは男を立ててくれなきゃ」

「ソウネ、オトコカラノプレゼント、サイコーネ。モヒトツアルカラ、コレデイッショネ」

調子に乗ったのか、商売の仕方なのか、露店主がもう一つペンダントを差し出してき

た。同じオーバーバル型の銀にさつきと左右対称になる羽が刻まれ、二つ並べると一對の羽が広がるデザインになっていた。プレートがそれぞれ独立した形なので、いかにもセツトって感じでもないのが素敵に見えて、うっかり商売人の手に乗りそうになってしまう。「でも、あたし、二つもいらぬから」

「ノー。カレシガツケルノ」

ノーノーと人差し指を振る露店主に、あたしと檀君は顔を見合わせて沈黙する。あたしはともかく、檀君はそういうタイプじゃないって！ 女の子とペアで何かを身に付けて、喜ぶ人とは思えない。誰とでも仲良くなれる性格だけど、相手に踏み込んだりしないかわりに自分も干渉や束縛をされたくないっぽいから、お揃いでとか嫌がる気がする。そう思っていたのに、沈黙の後で聞こえてきた声に仰天するあたし。

「これも下さい」

「え？ 本気!？」

「本気だけど、何かヘン?」

屈かがんでいる彼に不思議そうに見上げられ、気が動転したあたしは不思議なのは檀君のほうだよと言いつつになる。

「……ヘン、じゃないけど……。お付き合い記念って、そういうものなの?」

「そこ、こだわらなくていいから。俺もよく知らないし。追及が繰り返されないように

先に伝えておくけど、俺は女の子にプレゼントを買ったこともなければ、お付き合い記念を自分から言い出したこともない。お揃いで何かを持ったこともないよ」

早口で言われ、もしかしてちよつと怒らせたかとドキドキしていると、檀君はもう一つを店主に渡して、二つ分の代金を財布から出した。

「ネームイレルヨ、サービス。スゲデキル」

商売上手な黒人さんが、ウインクしてくる。

「名前、どうする?」

あたしを振り返る檀君の瞳に、不機嫌な色は見当たらない。

「そこまでは、いいよ」

怒らせたんじゃないかとよかつたと、密かに息をついて答えた。アクセサリーだって滅多に身に付けないのに、自分の名前入りなんて恥ずかしすぎる。なのに檀君ってば、

「じゃ、お願いします」

って、お願いしちゃってるし！ 人の意見を訊いておきながら、バツサリ無視するって、どういうこと!? 反論が言葉にならないあたしには取り合わず、彼は、あたしと自分の名前のスベルを伝えて、それからにっこり爽やかに笑ってみせた。

「記念だから」

よく知らないとか言いながら、さつきから勝手にお膳立てされている気がするのは、

とんでもなく女の子慣れしているからなのか、実は、天性の空気を讀まない才のある男の子なのか。どっちなの？

それから、原宿や表参道ヒルズをウインドウショッピングして、マックでランチをした。アクセサリーで散財させたので、せめてこだけは払わせてくれと言って、お手軽すぎるものだけどランチはあたしがごちそうした。よく考えたら、あいつのところから渋々とはいえ受け取ったお小遣いでおごるってのも、どうなの？ って、内心で自分を攻撃したけど、深く考えてもどうにもならないから割り切るしかない。

明治神宮にも行こうということになり、表参道のなだらかな登り坂を歩いた。混雑している通りの中ではぐれないように、檀君が手を繋いでくれている。

あたしたちは、とても自然に手を繋いでいて、神宮の橋を渡り終えて人にもぶつからずに歩けるようになって、離さずにいた。混雑の中でも、しっかりと付いてきているSPたちのプロフェッショナルさに舌を巻いているうちに、男の子と手を繋いでいるのを見られている気まずさも、いつしか消えていた。これがあたしだから、どう思われてもかまわない。

神宮まで来ると、ミカエルの家があるせいかな、なんとなく落ち着かなくなった。神宮と隣接する代々木公園の先にミカエルの家がある。近いといっても神宮も公園もとても広大なので、時間をかければ歩いて帰れる距離という程度だ。

お参りをしてから、神宮の森を散策する。自然に溢れていて、今暮らしているミカエルの家の敷地と印象が似ていると感じた。それを頭から追いやって、檀君といふこのひとときに浸ろうとする。シヤラには、「門限は八時よー！」って念を押されたし……

「さっきの、これ。渡しそびれた。付けてみる？」

ポケットから小さい包みを取り出した檀君に訊かれて、照れつつも頷くと、彼はあたしの背後に回り、ペンダントを首にかけてくれた。首筋や胸元にひんやりとした感触がする。

檀君が渡してくれたのは、HIZURIと、名前が彫ってあるほうだった。

……あたしの名前のほうは、檀君が持つんだ……。黙ってそうしてくれたことに、彼の想いを感じた。お揃いのアクセサリーを持つことも、負担じゃなくて、嫌じゃなくて。あたしのことを、ちゃんと想ってくれているんだ、って。

もう一つを、自分の首にかける檀君を見ながら、ほとんど見えなくなっている彼の首の傷を眺めた。確かめるように、腕の傷跡へも視線をすべらせる。自分が、命が危うくなるほどの怪我をしたことも、ミカエルがそれを助けたことも、彼は知らない。……意識なく眠る彼の隣で、あたしとミカエルが過ごした夜のこと。

あの夜のこと、そして、これまでミカエルとの間にあったことを振り返れば、とても

じゃないけど彼の隣にいられる自分じゃないのに、檀君が好きって気持ち捨てられなかった。あたしを好きだと言つて、伸ばされた手を、ふりほどけなかった。

「……ずっと……付けておこうかな。学校には付けていけないから、夏休みの間だけは」
俯いて、胸元のペンダントが木漏れ日を映して銀色にきらめくのを見つめる。

揺れる心を、強く、この恋へと繋ぎとめたいと思う。

あたしは檀君が好き。これでいい。間違つたことはしていない。

そう言い聞かせて、ふとした瞬間に込み上げてくる不安や罪悪感を宥めたかった。

「チェーンで首を傷つけないように、気をつけて」

笑いながらの優しい忠告に、檀君を仰いだ。あたしと檀君は、身長が十センチくらい違う。すぐ前に立つと、少し見上げる感じになる。

「その上目遣い、やめて。ただでさえ男に効果があるのに、高橋はなんていうか、瞳が綺麗だから」

檀君が、困つたように顔をそむけている。綺麗なんて、さらつと言われちゃうと、こつちだつてめちゃくちゃ困る。

「光が入ると、緑に見えたり黒になったり。カワイイとかだけじゃなくて、エキゾチックで、引き込まれそうになる。まじでヤバイ」

「そんなこと、ないよ。そう思ってくれるのは、身内の鼻屑目っていうか、なんていうか」

「失敗したかな」

檀君の溜息を聞いて、キュッと、胸が締めつけられた。

失敗、つて。なに？ どういうこと？

「そのうち、男が放つとかなくなるかも……。うちの母親も、あの子は将来が楽しみよって言つてたけど、大人になったらコイツとんでもないつて、今になって気づかされた」

「……それは、ほめ言葉？」

「心配で、誰にも見せたくなくなる」

静けさに、包まれた。臆するのを忘れて、眼差しを絡めあう。周囲の喧騒も忘れ、緑の香りの深い森に佇んで、見つめあっていた。時が止まったような、束の間の静寂。たぶん、どこかにいるだろうSPの存在も、このときだけは忘れていた。

檀君を見つめるあたしに、あたしの頬に、檀君の手がそつと触れて。……離れる。

初めてのデートで、何かを期待したわけじゃないけど。女の子が期待なんて、とんでもないとも思うけれど。ドキドキしながら、少しだけ、寂しいと思つてしまった。

あたしの表情からそれを読み取ったのか、檀君が魅惑的に微笑んだ。

「神宮の神様に怒られるから、これ以上は、禁止」

茶目つ気たつぷりに言うので、あたしもふざけて檀君の腕を叩く。

「これ以上つて？」

「高橋がいま、考えてたこと」

「何も考えてないよ？」

「ウソがヘタだから、無理すんな」

「考えてない。そう言うってことは、檀君が考えてたんじゃない！」

恥ずかしくて、むきになって言い返したら、

「考えてたよ」

はぐらかさずに、直球で言われる。

「でも、急ぐの、もつたいなくない？ それに、今はまだ……ちゃんとケジメをつけてからじゃないと、俺はそうしないって、決めてるから」

ちゃんと、ケジメをつけてから……それは、あたしに言われた言葉だと、思った。檀君はあたしに婚約者がいるのを知っている。それを解消してからと、そう言っているのだ。「高橋を責めてるんじゃないよ？ 俺の気持ちの問題だから」

檀君はそう言ってくれたけれど、彼が誠実さを示そうとしてくれてるのに、あたしはなんてみっともないんだろうと思ってしまった。そんなふうに大事にしてもらえる女の子じゃないのに、つて。

檀君があたしの手を絡めて、ゆっくりと歩き出す。当たり前のように手を繋ぎ、気負わずにそっと支えてくれるやさしさに自己嫌悪も和らいで、ためらいよりも安心が

強くなる。

「これからだよ」

彼のその言葉が、あたしの中に新しい風をもたらし、心を揺らした。

〴〵これからだよ

……そうだよね。これから、だよね。起きてしまった過去は、消せないけれど。これからゆっくり、歩いていければいいよね……

……と、デート中は、胸がいつぱいになってそう思ったけれど。

キセイジジツ。どーすんだ、あたし……！

檀君の、「ケジメをつけてから」という男らしい決断に感動して、うやむやになっていた。さっさとやってしまわないとこの状況から解放されないのに、肝心の檀君にその気はまったくなさそうだと判明してしまったわけで。いったい、どうすればいいの!?

その日の夕食のとき、視線を感じて顔を上げると、向かいにいるミカエルがあたしの胸元を見ていた。すぐにまずいと思って、顔をそむける。目ざとい人だ。ここで隠すのはおかしいし、これからはシャツの中に隠れるようにしておかないと……。何食わぬ顔をして千切ったパンを頬張っていたら、ミカエルは、食事を続けながらまだこっちを見ている。

「何？」

居心地が悪いので、何でもないふうを装って訊ねてみる。

「珍しいと思って。君、そういうのを付けるのが嫌いだらう。落ち着かないって言ってなかったか」

そういうえば、そんなことを伝えていた。ミカエルの従兄のダンジズや妹のシヤラも、あたしとミカエルの会話を耳にしてペンダントを眺めてくる。どこにいても居場所が確認できる発信機みたいなものを、アクセサリーの形で身に付けることを勧められたとき、「落ち着かないからやだ」、そう答えたんだった。

ミカエルやシヤラ、ダンジズ。スマクララグドス一族の中核であるラマイエ聖族と呼ばれる人たちは、体に二ヶ所、高精度のGPS受信機を埋め込んでいるという。体内に埋め込むのは簡単に外せないようにとの配慮からで、二つなのは、一方が正常に機能しなかった時のための保険だとか。以前は埋め込んではいなかったけど、あたしの父が日本で行方不明になった事件を受けて、そうするようになったそうだ。

居場所がわかるなんてイヤだけど殺されそうになった身としては、GPSそのものはしょうがないと割り切るしかない。けれどアクセサリーそのものが邪魔だと不服を言ったら、寝るときとお風呂以外は外さないことを条件に、GPS機能のある防水仕様の腕時計にしてくれた。腕時計だったら学校生活でも使っているから、我慢できる範囲だ。

「気に入ったから、付けてるの」

当たり障りなく答えると、ミカエルは、それ以上は訊いてこなかった。

誰からもらったか、絶対、知られたらまずい。これでもコイツはまだ許婚なのだ。解消すると心に決めてはいても、許婚である間はおかしな波風を立てないようにしなければならぬ。ペンダントヘッドの裏側に「HIZIRI」なんて名前まで彫つてあるのを見られたら、気まずいなんでもんじゃない。

夕食後にシヤラから、再び英会話の特訓を受けた。指導が上手だから覚えやすいけれど、ニッコリ笑ってスパルタ。それはたまに加わるダンジズも同じで、教えられる側は青息吐息。基礎は叩き込んだのだからと、最近是一段と要求が厳しくなっていた。

「昨日と同じところを間違えてるわ、阿見香。これで三度目。あと二回間違えたら、強制的にミカエルと初夜よ。ミカエルに伝えれば、すぐだから」

あたしが同じミスを三回すると、シヤラは極上の笑みを浮かべて、決まり文句で脅してくるの！一緒のベッドに寝ていても、決定的なコトは「何もなし」ことを、あたしとミカエルの様子から察している二人は、レッスンの最中、ことあるごとにソレを言う。実に楽しそうに。

「ミカエルが同意するわけじゃないじゃん！」

言い返しても、魔王も見惚れる美しい微笑で追い詰めてくる。

「甘いわ。彼は、一族のために教育されてきた人だもの、必要なことは何だつてやるわよ」
 「手加減を知らないご性格ですから。阿見香様もすでにご存知でしょう？」

ダンジズも一見穏やかそうに、けれど「絶対あたしで楽しんでるよね？」つてのがわかる目をして、加勢してくる。初夜は、冗談かもしれないけど……方が一、冗談じゃなかったら生き地獄なわけで、そうなっちゃ大変と脳みそフル稼働、火事場の馬鹿力なみに根性を発揮してミスをしないうちに頑張ってしまう。おかげで、終わったあとはもうグッタリ。

寝室に戻ると、珍しく先にミカエルがいた。いつも平日のこの時間はまだ執務室にいるのに、今日はあたしなんか眼中にない様子で、ソファに座ってぼんやりしている。そう思ってから、ぼんやり？ この男が、ぼんやり？ と目が点。

「具合悪いの？」

疲労が溜まりやすい人だということは、ダンジズからも聞いている。

「嫌いな男の心配をするのか。君は、器用な神経の持ち主だな。頭はバカなのに」

ちよつと心配になって声をかけたあたしに、無表情で、遠慮のない言葉が返された。

「あなたは、嫌いな人間が生き倒れていても、平然と無視していける神経の持ち主かもしれないけど、あたしは違うの」

遠慮なくこつちも言つてやると、ミカエルは鼻白んだようにそっぽを向いた。

「そういうのをイヤな女と言うんだ。自己満足な優しさに酔つて、自分を正当化する」
 「あたし、そう見えてるの？」

自覚がなかったことを言われて、ポカンとしてしまふ。

「他人は知らない。俺には目障りな女だが」

言うだけ言つて、バスルームへ消えていく。

メザワリナ、オンナ。しばしそこに立ち尽くしていたあたしは、ぐっと握りこぶしを作ると、あいつの座っていた場所にあったクッションをいくつか乱暴に引つ掴み、バスルームのほうへズカズカ歩いていってドアに叩きつけた。ついでに寝室のベッドからあいつの枕も取つて、投げつけておく。ええ、知ってましたけどね、それくらいのこと。口にするその根性が、許せないっつーのっ!!

その夜は同じベッドでなんか絶対に寝られない気分だったから、ソファでふんぞり返つて寝ていたはずなのに、朝になって目が覚めたらベッドにいた。

「金輪際、戻さなくていいから」

朝食の席についていたあいつのそばに立って、おはようの代わりにぶつめた。

シヤラとダンジズは、また始まったというように、お互いの目を見交わしている。

「風邪でもひかれて、未代まで呪われたらたまつたもんじゃない」

悠々と食事をしながら冷静に返され、カゼくらいで呪うか!! と鼻息が竜巻状態。

「あなたの存在そのものが、あたしにとつてはワラ人形なんですけど。そのうち五寸釘打たれないように、せいぜい気をつけてね。あ、ワラ人形って知らないか」

「殺人者といえども、死刑囚の最後の晚餐はけっこう豪華らしいぞ。楽しみだな」

口が減らないっ。

「あなたを料理したもので外なら、なんでもゴチソウだわ」

「百足のから揚げでも? 今度、メニューに追加してやろうか」

綺麗に整った自前の眉を片方だけ器用に上げて、あたしを見てくる。

……ムカデ。あたしが、ニヨロニヨロ系の虫を、卒倒するほど嫌いだと知ってるコイツなら、やりかねない。皿に載って出される図をイメージするだけで、ゾゾと鳥肌が立ってくる。

「三途の川を渡りたいなら、ぜひどうぞ」

口元をピクピク痙攣させて眩げば、一步も引かないミカエルからまたも言い返された。

「その川は日本以外にはないな。外国人の俺は渡れないだろう、残念ながら。ギリシャ神話に似たようなアケローン川というのが出てくるが、俺はそちらを渡るつもりだ。一応ギリシャ国籍だから」

ダンジズとシヤラが耐え切れないと言わんばかりに吹き出す。周囲のメイドも、たま

たま用事があつてやつてきたバーデインガムも、懸命に笑いを堪えていた。

「あなたと結婚するくらいなら、便所コオロギと結婚したほうがマシよ」

ニヨロニヨロ系は虫唾むしずが走るけどそれ以外ならまだ我慢できるし、こんな奴よりマシ、と負け惜しみでばやいたあたしに、ミカエルがわざとらしく目を丸くする。

「ベンジヨコオロギ?」

「あーら。天才サンでも知らないことがあるのねえ。カマドウマよ。トイレによくいるから便所コオロギっていうのよ」

食事の席なのもおかまいなしに高笑いで便所を連発するあたしに、そんな単語の意味まで理解しているらしい周囲の、声なき笑いが固まっている。

「是非そうしてくれ。となると、君の新居はトイレか。最新式のウォッシュレットを結婚祝いに贈ってやろう。ああそれとも、純金製の便座がいいか? 稼ぎがない旦那じゃ食いブチに困るだろうから、座りたい客を集めて手洗い料を徴収すればいい。食費ぐらいにはなるだろ」

微妙に凍りついている空気の中で、何食わぬ顔で毒舌の倍返しをしてくるミカエルを、あたしは歯を食いしばって睨みすえた。

「ご親切にどうも。生活費の心配までしていただいて。でもあたし、旦那に頼って生きていくのは性に合わないと思うから、ちょうどいいわよ。あなたからもビター一文貰もらわな

い。世話になった分は後で耳を揃えて返すから」

言い切つて憤然と部屋を出ようとする。

「阿見様。ご朝食は？」

「今日はいいません」

「では後ほど、軽食を用意させます。必要な時にメイドまでお言い付けくださいませ」

バーディングガムに呼び止められても、夕べから続いている憤怒のせいで礼も言えないあたしへ、微笑みが返され顔が赤らめられる。

「本当に、ミカエル様と仲がおよろしくて。私も使用人も一同、安心しております」

は？

本心から言っているらしいニコニコ顔を、絶句して、まじまじと眺めてしまった。

どこをどう見たら、仲良く見えるわけ!?

お昼まで英会話の勉強をしてから、シヤラとダンジズと三人で昼食を済ませた。

ミカエルが食卓に現れなかったので、どうしたのかと聞いてみると、仕事が詰まってくると食事を抜くことがよくあるらしい。集中している時は、軽食をつまむのはおろか匂いや味に気を取られるのも嫌がるのか。ちょうどあいつに用事があったので、バーディングガムが用意した栄養ドリンクとやらを、あたしはミカエルの執務室に運ぶことにし

た。そろそろお母さんのところに顔を見せに行つていいかと、お伺いを立てるために。

蓋のされた大きめのグラスの中に入った真つ赤な液体を歩きながら眺めていると、ドロツとしていてトマトジュースみたいで、トマトが嫌いなあたしは鳥肌が立つてくる。

どんな栄養ドリンクなんだろ、これ……

ノックをして中に足を踏み入れると、あいつは電話の最中だった。部屋の両側にはマホガニー材の書籍棚が並んでいる。同様の材質の広いデスクの向こうに、ミカエルは座っていた。背後の窓から差す太陽の光に、まっすくな黄金色の髪がきらきらと輝き、美しい横顔を彩っている。

彼は、首を傾けて耳に受話器を挟んでいて、片方の手で別の受話器を手にし、もう片方の手でパソコンを操作していた。ロシア語かドイツ語か判断すらできない言語で一方の電話を切ると、矢継ぎ早にもう一方の電話で違う言語を話している。これはあたしでもわかる、中国語だ。その電話が切られるのと、グラスを載せたトレイをあたしがそろりと彼の前に置くのが同時だった。

デスクから少し離れたところに世界地図やグラフが表示された百インチはありそうな大きなモニターが置かれている。机の上には七つのディスプレイがあり、パソコンがいくつも稼働していて、画面にはグラフや数値が忙しなく表示されていた。見慣れないミカエルの執務室と彼の仕事をしている姿に少々尻ごみしてしまう。

……あまり見たことがなかったけど、本当にバリバリ仕事をこなしている人なんだ……

「中国語も話せるんだ」

素直な驚きを口にするあたしを見もせず、速いブラインドタッチで二台のキーボードを操りながら、ミカエルが答える。

「広義では中国語になるが、俺が修得したのは北京語だ」

「よくわかんないけど、あんたって何ヶ国語話せるの？」

「二十一」

はあ？ 年齢聞いているんじゃないんだけど？ と思つてから、こいつの年齢は十九だったと思考の訂正が入る。

「……ほんとに、そんなに話せるの？」

後で侍女のカレンから聞いたところによれば、ダンジズは十七ヶ国語、シヤラは八ヶ国語を使えるらしい。ミカエルはその問いには答えず、グラスに口をつけながらいくつかのモニターの表示へ目を配ると、椅子に座ったまま広い半円型の机の内側を弧を描いて素早く移動し、今度は別のマシンで仕事を始めた。電話の一つが鳴り、ミカエルの繊細な指が内線ボタンを押して、スピーカーに向かい英語で応答する。

「何だ」

仕事の時は、基本は英語を使っているらしい。

『ウォリス証券のキム韓国支社長と、帝霞グループの静間専務からお電話が入っている。用件は、キム氏は昨日の米国FFレートについての確認、静間氏からは日本の石油の輸送路となっているシーレーンの件です。マラッカ海峡にて、五日前に原油輸送船舶が海賊の襲撃を受け拿捕された事件について、隠密裏に調停役をお願いしたいとのことです』

「ウォリスには君からの説明で充分だ。帝霞グループには本日午後四時にこちらから連絡すると伝える。それからこの件について、日本の防衛省事務次官に三十分以内に連絡をよこすように言え」

『かしこまりました』

英会話の特訓の成果なのか、ミカエルと秘書との英語のやりとりがなんとなくでも聞き取れていることに、自分で驚いてしまった。意味を考えても掴めない単語や、理解できない専門用語もあるけれど、ミカエルや秘書のネイティブの英語を聞き取れている自分に、すごくびっくりしている。見聞きしているだけでも忙しそうで話しかけちゃまずい気もしたけど、ちょっと嬉しくなって、電話を切ったミカエルへ問いかけた。

「海賊なんて、ほんとにいるんだね。大昔の話かと思つてた」

ミカエルは、こちらにチラリと視線を滑らせただけで、何も返さない。

あたしもこだわらずに、もう一つの疑問を口にする。

「あんだ、トマト嫌いじゃなかったっけ？ ジュースは飲めるんだ」

「飲むわけないだろ」

かなり嫌そうに眉をひそめて即答された。トマトにそこまで反応するあたり、あたしと同じだ。いまだに同じ血筋だとも親戚だとも信じられないけど、共通点のひとつくらいはあるのかなと笑いながら、彼の目の前のグラスを指差してみる。

「じゃあ、その、あやしげな液体は、なに？」

ドンと、あたしのほうへとグラスが置き直された。

「飲んでいいの？」

返事がないので、好奇心と恐怖心に駆られながら、ストローじゃないからいいかと一口もらってみた。もちろん、ミカエルが口をつけたところを注意して避けて。

「——おいしい！ なにこれ!？」

ブラッドオレンジとレモン、ベリーとカシスも入ってる。果物百パーセントのスムージーや飲むシャーベットみたいで、超爽さわやかフルーティでとってもおいしい。

「全部飲むなよ」

飲まないけどさ……止められなければ、勢いでカラにしてしまえばいい。そうではある。

「そんなケチくさいこと言わないでよ」

「君は昼食を済ませたんだろう？」

再び鳴った電話でミカエルが秘書からの用件を確認している。今度はすぐに取り次ぎを受けた彼の唇から、フランス語の独特なイントネーションが零れ出た。フランス語は、数を覚えたり、単語をちょこっと覚えたり程度だけど勉強させられている。発音を聞いてすぐに「フランス語だ」とわかるようになったのも、自分としては意外で、かなり嬉しう。

勉強をする楽しさなんて、これまで感じたことがなかった。学校へ行っても、将来を考えて仕方なくしてるって感じだったけれど、身に付いていくことの嬉しさを少しずつでも知り始めている。

「まだそこにいたのか。暇ならダンジズに伝言を頼む。今なら自分の執務室か、別館の秘書室にいるはずだ」

三分ほどで電話を切った後で溜息をついて言われた。ヒマ扱いされてるけど、あたしもあなたに押し付けられた地獄のカリキュラムがあるのよ。お昼ごはんの後の休憩時間に来て、退出するタイミングを失っていただけなのに。

「伝言くらいは、別にいいけど……」

「一言も間違えるなよ？」

「えっ？」

「六時間前に、米国のレイデンエネルギー株式会社にモルガン銀行がCDS(クレジット・デフォルト・スワップ)を行う緊急決定をしているんだが、そのキャッシュフローの予測をすぐに出せと伝えてくれ。それと、モルガン銀行がロッド・ヒングス銀行と昨日付けで確約したインターバンクのフェデラル・ファンドの短期金利についてもすぐに調査するように言え。同じく昨日付けで、米国連邦公開市場委員会が変更を決定した政策金利についても、徹底してプロファイルすること。先々週に選任されたばかりの連邦準備制度理事会の理事七名と、連邦準備銀行の総裁五人についても、詳細な経歴を至急ファイリングしておくように。理事の一人のフィリップ・レイノルズの元妻、ステファニー・ステイシーの最初の夫が、モルガン銀行の副頭取の妹と去年再婚しているはずだ。関連性を調べて、きな臭いようなら即座にFBIにリークしろ。サブプライムの余波で不安定なこの時期に、短期金融操作とはいえこの政策金利決定はおかしいと各国からも苦情が来ている。複数の銀行間で無担保コール資金が億単位でデフォルトする危険性が強い。大混乱になる前に徹底して精査しろと伝える。四時間以内だ。米国の市場が開く今日の夜までに決着をつける」

プロのアナウンサーも顔負けの早口で、意味不明な言葉を立て板に水のごとくまくし立てられ、数秒亦然。

「……何を言ってるのか、さっぱりわからないんですけど」

辛うじて記憶に引つかかったのは、一時期テレビのニュースでよく耳にしていた、サブプライムなんちゃらくらいで。すると、あたしがこの部屋に入ってから、初めてこちらに向き直ったミカエルが、挑発的にすがめた目で睨んできた。

「役立たず」

辛辣な眼差しと暴言に、グサリと突き刺される。口をあぐりと開けているあたしなんぞにかまいてもせず、彼はそのまま受話器を取り、今聞いたことと似た話を電話の向こうに英語で告げた。

「……ダンジズに電話したの？」

「携帯にかけた」

息も絶え絶えに疑問を投げれば、平然と言い返し、再び手元のモニターを注視し始める。

——だったら、最初からそうしろつつうのよ！

「あんた、今、あたしに、意地悪したでしょ？」

「君のバカさ加減を確認したただけだ。あれだけ勉強させても、相変わらず頭が悪い」

嫌味をぶつけられ、あたしはもう、返す言葉がなかった。

シヨックとか落ち込んだとかいうんじゃないで、もうこいつと話をしたくない、気持ちはそれだけだった。人がせつかく、「ああ、勉強するって悪くないな。カリキュラムにも、もうちょい前向きに取り組みそうだわ」的な気分になり始めてたつていうのに。それを

まるで読んだようなタイムイングで、ドラム缶で水を浴びせてくる。

頼むから、ダレかこの性悪男をバツサリ始末してほしい。まじで！ 皆が皆、あんたみたいに化け物じみた脳ミソを持つてるわけじゃないのよ！！

怒り冷めやらぬまま大嫌いな数学の勉強に向かったあたしが、お母さんのことを聞くのすつかり忘れていたと気づいたのは、数学の講習が終わる頃だった。

なんであんなに腹の立つ人間をあたしの前に現したのか、神様を罵りたい。

……役立たずって。

ええ、ええ、そうでしょうよ。完璧なミカエル様から見りゃあ、あたしのほうが役立たずのゴキブリ以下ですよ。

ゴキブリのほうがまだ価値があるって言われそうだし。アツタマにくるつたらないわ。

数日後には、檀君と二度目のデートを楽しんだ。友達と会うのには文句を言われないので、檀君と出かけるときは必ず文月をダシにしている。帰ってから文月に、二度目もドキドキだった！ とメールしたら、怒りマークだらけの返信があった。

『あんたさ。夏休みに入ってから忙しい忙しいって、女友達は放つといて檀とはデートしてるわけ？ そこまで薄情な女だとは思わなかったよ』

……まずい。

シマッタと大慌で、メールを返す。忙しいのは事実だけど、文月からの誘いを三度ほど断って、檀君とのことを優先していた自分を反省した。しかも了解なく、文月のことを口実にしてるし……

『ごめん！ あさって午後、空けてもらうから。会わない？ ダメ？』

詰まっている勉強は、他の日に振り分けてもらうしかない。あたしの教育係を任されているシヤラは、優しい顔をしてかなり容赦がない。さすが、ミカエルの妹！ と実感させられたことが何度か。しかも双子つてのが恐ろしい。サドの血がまんま同じなんじゃないかって思えるから。容赦がない上に彼女曰く、快感まで伴っているらしいのだ。

『昔はビシビシ教育されて、憤慨してたのよお。なのに、逆に教育するのって、キモチイイのね！』

あいつも快感体質かは知らないけど、二人は絶対S気質のサラブレッド兄妹だわよ。

『TORAYA CAFE. に行きたい。おっつてくれたら許す』

文月からの即返信には、和菓子で有名なお店が指定されていた。

和菓子好きだもん……。つうか、高そうなんですけど！

『TORAYA CAFE. っつ、どっだったけ？ しかもそこ高くない？』

『表参道か六本木のはず。青山にもあるかな。あんた最近、カネモチじゃないの？』
ぐっと思が詰まる。あたしが、いかにも金持ち臭がする男と一緒に住んでいるのを、

文月は知っている。自由に使っていいお小遣いだけでなく、クレジットカードまで渡されていることは言っていないのに、嗅ぎ付けているのだろうか。

衣服や身の回りのものは揃えられているので、お小遣いといっても、遣う機会はほとんどない。それに、「きゃー！超ラッキー!!」と遣ってしまえるほど、図太くもなれない。初デートの前日にも、札東で五十万渡され目玉が飛び出そうになった。「五分の一でいい!」と叫んだら、あの三人、信じられないものを見るようにあたしを眺めたよ。

「渡したカードも自由にしていいが、現金よりもカード派なのか」

あいつが言い、シャラもダンスもそれに納得したようなので、激しく首を振って丁重にお断りするしかなかった。親戚達の婚約者だのって言われても、この人たちはあたしにとって他人同然。一円だって、ホントはもらいたくない。

「あたし今まで、ひと月のお小遣い、携帯代を別にして一万円だったの。それで、まあ、充分っていうか。だから、こんなにいらない」

正直にそう言ったあたしに、シャラが詰め寄ってきた。

「一万円じゃ、何も買えないわよ? 外出しても食事だつてできないわ。お茶とケーキくらいなら食べられても、それじゃおなかもいっぱいにならないじゃない」

そう言って泣きそうな顔をされたのは、忘れたくても忘れられない。

「苦労したのね。これからはもう、そんな苦労も心配も必要ないわ」

本気で鼻を睨つて、抱きしめてくる彼女の肩の向こうには、深刻そうな顔でお互いを見ている男が二人。……ナニか、強烈に、激しい誤解が発生している気がする。だいたい、一万円でお茶とケーキしか食べられないって、どこのポツタクリバーだよっ! っ、こつちがびっくりよ。

へんな同情をされ続けても困るので、渋々それを受け取って、一万円のみをお財布に入れさせてもらい、残りはあたしにあてがわれたクローゼットの奥へ片付けておくことにした。いつの間に用意されたのか、あたし名義のクレジットカードも一緒に。

『表参道は檀君と行ったばかりだから、青山か六本木にしない?』

『あっそう。ごちそうさま。じゃ、六本木で決まりね。久しぶりにヒルズも散歩しようよ』
『まだおごつてないし、おごるとも言っていないけど?』

『イヤミも通じないほど、頭がとろけるの?』

イヤミもだつたのか。どんなイヤミだつて笑顔で歓迎できちゃうわよ。檀君と両思いになれた幸せに浸ひたつてるとね。

どんなイヤミといつても、あの性悪レイプ男の毒舌だけは、どうにも許せないけど。

和スイーツが食べたいと騒いでいたわりに、当日になって文月は先にアイスが食べた

いと言いだした。

「行きたいって言ってた、トラヤカフェで食べればいいじゃん」

「せっかくだから大理石で練ったのがいいな」

コールドストーンクリーマリーのアイスなんて、贅沢ぜいたくすぎる。

「もちろん自分払いだから」

「当然でしょっ、おごるのはトラヤだけ！」

主張したら、横目でチラッと見てからかっってくる。

「お嬢になつたわりに、ケチだねー」

「……それ、檀君にも言われたんだけど。お嬢っばいって。髪の毛のせい？」

「似合ってるよ、そのショートボブ。でもその形、三週間に一度はカットしないとまたなくない？ ボブってそれが面倒で」

「その頭をどうにかしろ」とミカエルに呆れられ、あの家に定期的にやってくるヘアスタイリストにカットしてもらったもので、これからもマメに切りに行く予定らしい。

「うん。二週間に一度は必ずって、言われた」

カネモチじゃないと無理だわねと笑いながら、文月が言う。

「髪だけじゃなくて、歩き方も姿勢も変わったよ。前がおかしいってわけじゃないけど、洗練された感じ？ なんか習ってんの？」

「マナーでね。歩き方、立ち方、椅子の座り方、おじぎの仕方。毎日やらされてる。あとはダンスと茶道も。茶道を習うと、最小限の動作でいかに美しく振舞うかが身に付くとかで」

うんざりとしながら並べ立てて、溜息をついた。

「最悪。全身凝こって、一週間であの世にいきそう」

「思うでしょ!? もうクタクタだよ」

あたしの泣き言に、ほったらかされて拗すねていた文月の気持ちもほぐれたらしい。

「一番高いのをおごらせようと思ってたけど、二番目のでいいよ」

あたしの肩をポンポンと叩いて高笑いしながら、地下鉄に乗り込んだ。

お目当てのアイスを食べて二人で適当にぶらぶらしながら、溜たまりに溜たまっていたお喋しゃべりを楽しむ。既成事実については文月から不吉なことを予言されてしまった。

「あなたのことだから、この調子じゃ、三年経っても同じことを言ってるよ」

「文月だって、三年後も処女かもしれないじゃん！」

「別にそれでもいいよ。妄想ではのめり込めても現実では冷めてるの、あんたも知ってるじゃん。恋愛したいって思わないんだよね」

「そのうち、この人！ って人が、出てくるよ」

あたしも文月のために、それを信じたい。

「あんまり期待しないでおく。あんた見てると、リアルの恋愛って楽しそうに思えないし」
「楽しんでるよ？ あたし」

「そう？ しんどそうに見えるけど」

「しんどいのは、あいつのことだけ！ 檀君のことまで一緒にしないで」

「はいはい。そうだね。つか、ちゃんと計画立てなよ。檀だつて男なんだから、それとなく誘えば乗ってくるって」

カップルを装ったSPの男性と女性は、相変わらず後ろにいる。檀君も文月も気づかないあたり、彼らはやはりプロなんだなと思う。それからトラヤカフェに行き、パフェを文月にごちそうした。そこを出た後は、甘いものばっか食べたからしよっぱいもんだが欲しいよね、なんて言いながら、ヒルズを離れてうるうるする。

そこへ携帯が鳴った。着信を見ると、ミカエル。——ゲッ、なんでコイツが。

強制的に渡された新しい携帯に、こいつやシヤラやダンジズの連絡先、SPの連絡先まで勝手に登録されてあつたけど、こいつからかかってくるのは初めてだよ……

ためらってから通話ボタンを押す。文月は、金髪男とのことを知ってるから隠す必要もない。

「もしもし？」

不機嫌な調子になるのを隠し切れずに出ると、

「今どこにいる？」

聞こえてくるのは、耳慣れたあいつの声。出たのが誰かなんて確かめることなく、単刀直入に。

「六本木うるうるしてるとこ」

「って、高精度GPS受信機付きの腕時計を持たされてるし、すぐわかるんじゃないの？」「ヒルズの近く？」

「ヒルズはさっきまでいた。今は……ラピロス六本木のあたりにいる」

周囲を見回して、答えた。車道の騒音を避けるようにして携帯を耳にあて直す。

「急用があるから迎えに行く。ヒルズの66プラザ前の通りに向かうから、その辺にいろ」「急用って？ 66プラザ？」

街をうるうるしても、建物の名前までは覚えてないことがしよっちゅうだ。

「エントランス広場前。事情は後で話す」

「って、あの、タコ足宇宙人のオブジェがあるところ？」

一瞬の、沈黙。

「蜘蛛クモだろ。あれは」

言って、プツリと切れた通話。電話ですらも、愛想のかけらもない男。

「ヒルズのエントランス広場のほうにあるバカでかいオブジェ、見たことあるよね？」

「なんだと思う？」

「あの巨大なやつ？ 蜘蛛でしょ？」

隣の文月に訊くと、ミカエルと同じ答え。

「あれ、蜘蛛なの？ てっきりタコ足姿の宇宙人だと思ってた」

そうだったんだと目を丸くしているあたしを、文月が真顔で見やってくる。

「あんたってやっぱ、ちょこちょこおかしいよね」

待ち合わせた場所に足取りも重く辿り着けば、これまでも何度か見かけたことがあるあいつの愛車らしい銀色の車体が目に入った。ぶらぶら歩いていた間に到着していたみたいだ。

運転手付きの車で来ると勝手に思っていたけど、自分の運転で来たらしい。ハザードを点滅させた車に寄りかかり、サングラスをかけて佇たなずんでいる。恐ろしいほどの注目を浴びて。

周辺の人がみな立ち止まってあいつを眺めていて、ただでさえ人通りの多い日曜のヒルズ前がものすごい有様になっていた。金髪を風になびかせた長身の美麗な外国人が、派手で高そうなスポーツカーに寄りかかって立っているの、道行く人たちが口々に「モデル？」「CMの撮影？」「映画撮ってんだよ！」などと騒いでいる。

……うわあ、近づきたくない。回れ右して、知らんぷりしたい！ 知り合いだなんて

思われたくないし、あんなのが婚約者だなんて考えたくもない。ましてこんなところへ出ていって、妙な注目を浴びるのはもうコリゴリ。

通りすがりの、本物のモデルに見えるくらい綺麗な女性たちが声をかけてくるのを一言二言であしらひ、あいつは野次馬で賑わう空間の中で一人泰然としていた。

関わりたくなくて体が自然に後ろ向きになるのを、文月が止めてくる。

「他人のフリで逃げるつもり？」

「いや……ちょっと、連絡して、もう少し先に車を回してもらおうかと」

口ごもって返していたら、

「阿見香」

呼ばれてしまった、文月ではない人間に。

早々に見つかってしまったらしい……

観念して盛大な溜息をつくあたしの隣で、文月はニヤニヤ楽しげに笑っている。

「諦めな」

もう諦めてるよ……。げんなりして、あいつの待つほうへ方向転換して歩き始めれば、「じゃ、私はここで。一緒にいてヘンな注目浴びたくない」

さっと文月に背を向けられ、泣きべそをかきたい気持ちであたしは腕うでに縋すがりついた。

「あたしだって嫌なんだよっ！ 送ってくよ、あいつだってそんなくらいしてくるって」

「無理でしょ。あの手の車はツーシーターじゃない？ 乗れても乗りたくないけどね」
 じゃあね、また電話して！ と片手を振り、文月はすぐさま逆方向へ逃げてしまった。
 実に、彼女らしい。すんでのところでの鮮やかな逃げっぷりは、見事だよ。親友への
 思いやりはないのか？ 彼氏優先の薄情者って言われたけど、アンタも充分薄情者だ
 よ！

……そうはいつでも、仕方ないか。文月には関係ないことだし……もう一度溜息をつ
 き、さっさと退散した人でなしに背を向け、イヤイヤなしかめっ面であいつに近づけば、
 開口一番に「遅い」と文句を飛ばされ、こっちもカチン。

「つてか、なんで、車の外にいるの？」

自分がどれだけ目立つ人間なのか、自覚はないのか！?

「君がわからないかと思って、配慮したんだろ」

「わからないわけじゃないでしょ。そんな車、減多に走ってないし」

無数の視線がザクザクと突き刺さり、集団眼力で即死しそうな心境で憎まれ口を返す。

「早く乗れ。ここは駐停車禁止なんだ」

いっぺん捕まればいいのに。少しくらい恥かけばいいのよ、つたく。罰金くらいじゃ
 へとも思わないだろうけどさ、この男は。あたしと違って鋼の心臓の持ち主だから。

——なんであんなブスが。

聞こえてくる悪口。たっぷりジロジロ見られて品定めされて。コイツといるとこんな
 ことばっかだ。ブスなのはじゅーぶん自覚してるから、教えてくれなくてけっこうよ。

声が出たほうをチラリと睨んで、ドアの開けられた車道側の助手席に渋々と体を詰め込
 んだ。ドアを閉めたあいつがボンネット側を回って左の運転席に乗り、車が発進する。

「いちいち本気にするな」

右手でギアチェンジしながら、ミカエルが言った。陰口が聞こえていたらしい。

「本気にしてないよ。あんなので傷つかないし。いまさら」

強がりではなく言ったら、ミカエルは会話を続けるつもりはないらしく、黙ったままだっ
 た。車内はまさに動く密室状態で、乗ってから激しく後悔した。地下鉄で帰るって言い
 張ればよかった。完全な二人きりなんて、居心地が悪いつたらない。家では、ドアを開
 けて出ていけば、誰かしらがいるから……

あたしも、ミカエルも、しばらく無言でいた。ステレオからは、邪魔にならない程度
 の音量で音楽が流れている。あたしでも知っているクラシックの曲、ビバルディの「春」だ。
 こんな車で首都高を飛ばしながら、ビバルディを聴く。つくづく普通じゃない人。あた
 しからは、程遠いところにいる人だ。

「急用って、なに？」

それで迎えに来たんだよねと、騒動で忘れかけていた理由を訊ねた。

「これから、英国に行く」
 「英国？ は？ あなたが？」
 「君もだ。祖母からのお達しだ。すぐにでも顔を見せに連れてこいと」

「誰を？」

「君を」

「何のために!？」

「自分で考えろ」

最後は投げやりに息をつかれ、以降、隣の意地悪男は一切口を開かずに運転するのみ。あたしは、最高に落ち着かないこの状況に加えて、予想もしなかった展開に呆然。つていうか、これから？ イギリスに行く？ あたしが!？」

現在、スマクラグドス一族の本宅は、一族の人間のみの上陸が許可されている地中海のスマクラグドス島にある。それとは別にイギリスには公式に利用されているセカンドハウス、通称クイーンパレスと呼ばれる別宅があつて、イギリスが好きなミカエルの祖母はそこに定住しているのだという。

「地中海の明るすぎる空がイヤ。英国の気紛れな空が好き」というのが、彼女の口癖だと聞いて、相当気難しい婆さんじゃないかと会う前からあたしはビビりまくり。

てつきり一度ミカエルの家に戻るのだと思つたら、着いた先は成田空港だった。ミカエルが乗り捨てた車を、空港に来ていたバーディングムが運転して去っていくのを、あぜんとして見送る。

出発ロビーにはシヤラやダンジズ、カレンもいて、なぜか当のあたしが知らぬ間に作られていたパスポートを渡されて、ちんぷんかんぷん。いつの間にかこんなもの、準備されていたの!? しかも「阿見香様のお荷物です」と、スーツケースまで用意してある。

「阿見香名義で作ったクレジットカードも持ってきたから、念のために持っておいてね」シヤラに渡されたそれは、クロゼットにお小遣いと一緒押し込んでいたはずのもの。

………。カレンが気づいていたのだろうか。あの家にいる限り、あたし個人のプライバシーはないも同然なのかもしれない。

「なんでこんなに急ぐの?」

「さつさと来いとうるさいからだ」

ミカエルが答え、ダンジズは肩を竦^{すく}めている。

「もしかして、お祖母さんって、超コワイ人？」

ミカエルでも、あつさり素直になるような。

囁^{ささや}いたあたしに、「そうでもないですよ」と微笑を見せ、ダンジズが安心させてくれた。